

中国のほんの話(37)

中国の怪奇小説

(その巻)

蔭山 達弥



世代を超えて愛され続けている水木しげるの妖怪漫画を実写化した『ゲゲゲの鬼太郎』が4月28日から公開され、それに先立ち4月1日からフジテレビ系列(地上波)で新作アニメシリーズが始まるなど、日本では、いまや何回目かの「ゲゲゲ」ブームだ。

閑話休題。中国では幽霊(死者が成仏できず、この世に迷い出て現した姿。亡者。『岩波国語辞典』)のことを‘鬼’という。‘鬼’とは中国では亡者に限らず、この世のものでないもの、化け物全般をさすことばでもあるが、本来はあの世の人であるようだ。貝塚茂樹博士によれば、‘鬼’という字は‘由’と‘人’から成り立っており、人が由、すなわち大きな面をかぶっている形をあらわしたものの。古代国家の祭祀の主宰者であった巫が降霊術を行うとき、異形の面をかぶった姿を象形化したものだろうとされている。

中国では六朝(りくちょう)時代(紀元3~6世紀)になると、ある一定のスタイル(何ら物語的なふくらみのない簡潔な記述)で、幽鬼、妖怪、神仙の話など、様々な不思議な出来事を記した書物がたくさん現れ、それらは「志怪」と総称された。「志」は「誌」と同じで、「怪を(記)す」意味である。それが文字に書かれて伝えられるようになって、「志怪小説」という小説の一ジャンルになり、六朝から清にいたるまで、おびただしい数の奇談怪談が書かれた。これらの「志怪」の書は中国から輸入され、『今昔物語』を初めとして室町時代、江戸時代の小説類(滝沢馬琴『南総里見八犬伝』、上田秋成『雨月物語』)は、ほとんど皆これら中国の小説の影響を蒙っている。

さて、日本語で中国の「志怪小説」を読もうと思っても、翻訳は『搜神記』(平凡社・東洋文庫)を除いて、いずれもわずかな抄訳である。その中で、皆さんにお薦めするのは岡本綺堂の『中国怪奇小説集』(旺文社文庫、のち光文社文庫)である。中国の幽霊は何の縁もないところにひょっこりと現れ出る。一見たわいもないがのちのち考えるとぞっとするほど恐ろしい。日本の怪談とは趣を異にする中国の怪奇譚を六朝から清に至る各時代から220種抄出して、彼一流の名文で綴る中国志怪の書の世界である。

翻訳ではないが、原典をふまえ、作者なりの文体で新たにまとめあげたのが、田中貢太郎(こうたろう、1880~1941)の『中国の怪談(一)』、『同(二)』(河出文庫)である。田中貢太郎は高等小学校卒業後、土地の漢学者に師事して、漢籍に親しみ、同時に酒の味も教えられた。中国の古典では『紅樓夢』と『聊斎志異』につよく魅かれたという。十五で酒の味を覚えた貢太郎は、土佐の先輩である大町桂月に師事し、明治36年の最初の上京から、大正14年の師の死までの二十余年、師とともに各地を紀行し、詩文をまとめ、酒を楽しみ、内外の書籍を愛読した。貢太郎が怪談物を最初に執筆したのは、大正7年11月号の『中央公論』に掲載された「雨夜草紙、魚の妖・虫の怪」からである。以来多くの怪異物を執筆することになる。貢太郎はもともと中国の怪談が好きで、読み漁ってきたことの集成が多くの怪談物となった。貢太郎は大正12年と13年に二度、中国を旅している。杭州の西湖をめぐる伝説『西湖佳話』から「雷峯塔物語」や「断桥奇聞」をまとめているが、杭州を訪れた時、さぞ感慨も深かったであろう。中国の怪異譚に人間味を見た貢太郎の怪談は人間ドラマとして読めるものが多い。

中国志怪の世界に魅かれるようになった漫画家に諸星大二郎がいる。『漫画アクション』に掲載された漫画を単行本化したのが『諸怪志異』(3巻)である。中国の古典を基にしてオリジナルで話を作った漫画の数々を読んでいると、あたかも宋の時代にタイムスリップしたかのように惹きこまれる。道士が「犬土」という人に呪いをかける妖術を打ち破る『犬土』ほか、愛らしい少年、阿鬼が活躍する諸星ワールドを是非堪能して欲しい。

かげやま たつや(教授・中国文学)